

棚田に吹く風



7 2012
月号
Vol.83
隔月刊

2 特集

座談会 石田議員に聞いてみよう!
TPPと棚田

6 棚田・里山からのたより
大学生は風、地元住民は土
～袖志の棚田再生プロジェクト～
京都府京丹後市丹後町袖志

8 フォトエッセイ
棚田の四季

9 棚田博士は今日も行く
南予にある壺神山中腹西斜面の棚田
愛媛県大洲市慍谷

12 会員のひろば

14 棚田ネットワークの
かつどうノート
新事務局長就任のご挨拶

15 Project Report





写真左より、玉崎、安井、石田議員、岩野

特集

座談会 石田議員に聞いてみよう!

TPPと棚田

棚田とTPP<環太平洋経済連携協定>は
なんか関係あるの?

太平洋周辺の東南アジアやオセアニア諸国、アメリカなど九ヶ国が参加して、原則関税無しの自由貿易圏を作ろうというのがTPPの構想です。日本がこれに参加した場合、どんな影響が出るのか? 内閣府、農水省、経産省などが試算していますが結果は三者三様です。農業の分野、特に棚田に関わる私たちにとってどんな影響があるのか? 棚田とTPP双方に詳しく、会員でもある石田議員を訪ねていろいろお聞きしました。

■出席者

石田 三示

衆議院議員・NPO法人
大山千枚田保存会理事長

岩野 知子

会員・主婦

玉崎 修平

会員・デザイナー

司会

安井 一臣

会員・理事

司会

石田先生、本日はお忙しいなか時間を頂きありがとうございます。まず若手の会員お二人から自己紹介をお願いします。

岩野

以前石田さんに大山千枚田のお話を伺う機会がありました。それが棚田との接点となり、棚田ネットワークで時々イベント等のお手伝いをしています。個人的には福島・喜多方や京都・宮津の棚田などに通っています。

玉崎

稲倉棚田でオーナー制に参加したのがきっかけで、棚田ネットワーク会員になりました。インテリアデザイナーとしての業種を活かして棚田フェスティバルのブース作りなどにかかわってきました。75年生まれのロストジェネレーション世代の視点からいろいろお伺いしたいと思います。

司会

最近、TPPという言葉がマスメディアで取り上げられるようになりましたが、関心度はまだ低いように感じます。そこで、先ず全体像について石田先生に伺います。

石田議員 (以下石田)

私が民主党の比例区で当選させていただいた当時はTPPの話はなかったです。その後、菅さんが突然TPP参加を言い出したわけで、選挙公約とも相容れるものではなく、離党も止むなしということで「きづな」になったわけです。それとは別に、農業問題の根幹は不適切な関税にあると当初から指摘してきました。農山村の疲弊の典型的な例が林業なんです。戦後、関税が自由化され、安い外材が大量に輸入されるようになると日本の林業は成り立たなくなりました。TPP参加により外国の



安い農産物が大量に輸入されるようになる。国内の農業は衰退し、林業の再現になる恐れがあります。

もう一つは「食料の安全保障」という観点です。70億の世界人口が2050年には90億人を超える。いま農地の砂漠化等で単位面積当たりの収穫量が落ちており、多くの国が国家戦略として食料争奪戦をくり広げています。一方、日本では水田の40%が放置され食料自給率も40%に留まっています。

さらに先進国としての役割というのがあります。日本は比較的金持ちなので輸入食品も買えるが、貧しい国の人達は買えなくなる。豊かな者は生き残り、貧乏者は飢餓に苦しむ状況が出てきます。先進国は自国向けの供給を確保しながら途上国の食料支援を果たさなければならぬと思う。

TPPは農業だけの問題ではなく自動車関連など広範囲にわたっています。私自身の一番の関心はやはり食料の安全保障

司会

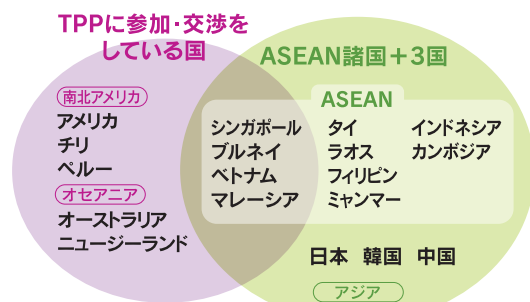
ということになります。

TPPの最初の切り口は農業、対他産業という構図でしたが、幅広い分野に影響が出てきますね。

石田

TPP議論を見ていると、賛成派のなかでもなかなか日本のメリットを説明しきれないのが現状です。出発点が日米関係を悪くさせたくないということにあるからです。

いまTPPが止まっているのは、米国内で農業関係者は推進、自動車関係者は反対と世



アジアでTPP交渉に参加しているのは4カ国のみ

司会

論が分かれており、オバマさんはどちらにもつけない状況にあるからです。

岩野

いまのお話を伺って岩野さんや玉崎さんはいかがですか。

石田

最後の部分で話されたアメリカの自動車業界の事情とは？日本の自動車の関税というのは既に下がっているんですよ。日本の自動車の方が優秀なので、これ以上アメリカに入ってくるものと自国の自動車産業の衰退につながり、雇用不安が増すと反対意見が多いんです。



玉崎

アメリカとの関係は分かってきましたが、他の国々との関係を伺いたいと思います。

石田

TPPの原点としてパシフィック4という協定があって、参加国は貿易への依存性の高い小国で構成されてきたわけです。そういう所に日本やアメリカなどの経済大国が加わることで、基本的な性格が変わってしまうと思います。民主党もアジアは皆で協力して伸びていこうと東アジア政策というものを立ち上げましたが、中国市場絡みでアメリカが待ったをかけて来たといういきさつがあります。

司会

石田

先行実施の米韓FTAについて少し解説をお願いします。FTAは2国間の関係であり、両国が同じ力関係であればそれなりのメリットがあります。米韓の場合はそうない。韓国は自動車や電機を優先したため農業が犠牲になり、豚肉生産者の6割が倒産に追い込まれました。韓国でのFTAの最大の問題は、自国

民に内容が充分説明されること無く実施に踏み切ったことにあります。

司会

韓国の国内法と条約ではどちらが優先するのでしょうか？

石田

条約が優先されますので国内法による規制がないがしろになるわけです。

TPP交渉の現状

司会

現段階でも、すでにアメリカは自動車や牛肉等で具体的な要求をしています。政府はどう対応しているのでしょうか？

石田

協議は全部をテーブルに乗せるということで、品目に聖域は無いということです。事前協議の参加については首相判断で出来るわけなんです。最終的には国会の承認が必要なので、そこで議論して結論を出せばいいじゃないかという見方もあります。しかし、ここが一番の問題点なのです。国家間の交渉ごとで最後に国会が否決するということ



司会

は基本的にはあり得ないからです。だから事前交渉に参加しないように一所懸命世論つくりしているわけです。

石田

日中韓FTAの動きは？
TPPが牽制になって日中韓が動き出したという状況ですが、私は元々日中韓とかASEAN+6がいいなと思っています。

TPPと棚田の未来

司会

TPPの棚田に及ぼす影響などについて岩野さんいかがですか。

岩野

棚田地域は集落の機能をどう

石田

維持して行くのか苦心しています。TPPによって社会全体の活力が低下した時に更に厳しい状況になるのでは、と危惧していますが実際はどうでしょうか。

石田

日本農業の中心はなんといっても水田での米作りです。お米があるから中山間地域が成り立つわけですが、水田が無くなれば里山も含め一帯が荒れ放題になっていくことでしょう。20〜30畝規模の平場の水田は生き残れるだろう

司会

が、小規模の棚田地域が影響を真っ先に受けることになりました。

石田

日本の農業や食料の将来について石田先生はどのような考えをお持ちでしょうか？

食料の安全保障の観点からも先ず自給率を50〜60%に上げる必要がある。それには所得補償が必要です。農業が命と捉えるならばヨーロッパ、特にスイスの等高線別補償制度は検討に値すると思う。

さらに中山間地域のもつ多様

司会

な価値をどう観るかは重要で、真剣に議論しなければならないでしょう。

玉崎

この点についてお二人はどう思いますか。

石田

棚田は生産目的や販売目的ばかりではなく、オーナー制度や体験活動など地域の特徴を活かした取り組みが行われています。自給率向上に向けTPPの利点というものがあれば活かしていけないかと感じます。

司会

象徴的な棚田については観光的な部分を活かしたり、体験の場として保全していけると思いますが、その他の棚田地域については、食料生産の現場を守っていくという政策がない限り経営が続かなくなる状況にありますので、TPPのメリットを見出すのは難しいと思います。

石田

TPPの問題点が少し分かってきましたが、政府が前のめりになっている理由は何でしょう。

アジアの成長を取り込むと

岩野

言ってますが、TPPを先に進め日中韓をけん制しようとする意思があるようです。「早くTPP協議に入らないとルール作りに参加できない」と言っているわけですが、真意はよくわからないというのが現状です。

石田

食に関する規制については、日本の方が厳格だと思えますが、TPPによって日本の規制が緩和されると食の安全はどうなってしまうのかという不安があります。日本の牛肉検査制度などは維持できませんか。

司会

日本の農業はいい物を作っており中国へも高い値段で輸出できるので心配は要らない、という意見もありますが、中国でもコシヒカリは作れるし、日本の農業は日本人のための安全な食糧生産の場としたいものです。

石田

の残留農薬規制がきびしい。一方米国産のお米はどうでしょう。

司会

米国民にとってお米は主食ではないので農薬規制が緩くても残留農薬問題は小さいが、これが輸入され日本人の主食となった場合には話が違ってきます。大店舗法がきっかけで地方の商店街がシャッター通りになったように、米国型の社会構造の押し付けには多くの問題があります。

玉崎

私達の心構えとしては。日本の国のあり方を真剣に考えるべきです。TPP問題も最後は世論が動かすものです。が、学生の関心が低いのが気になります。

石田

ロストジェネレーション世代は人口比率でもマイノリティであり、意志が社会に反映されない諦めも感じます。それは日本の社会の閉塞感から来ていると思う。日本は車や電化製品による高い水準の生活をしているが満足感が低い。成長期を過ぎた社会の停



岩野

した。岩野さん、石田先生、お願いします。

石田

実はTPP問題は推進・反対の両極論をメディアで見聞きするうちに、一歩引いた態度をとっていました。ですが、棚田地域の景観・伝統文化や集落、そして私自身の生活も大きな影響を受けるのではないかとという圧迫感を感じます。今後は気持ちを新たに注目して行きたいと思っています。

司会

TPPは様々な問題を抱えていますが、私は何と云っても「食の安全保障」が大切だと考えています。日本の社会から農村が消えたらどうなるか。世論づくりが特に大切になってくると思います。

本日は石田先生をはじめ皆さん方の率直な意見を伺い、たくさんのお話を学ぶことができました。ありがとうございます。

(5月28日・衆議院議員会館にて)

棚田・里山
からの
たより



大学生は風、地元住民は土

（袖志の棚田再生プロジェクト）

袖志の棚田

京丹後市丹後町袖志は、山と海に囲まれた、半農半漁の営みが残る近畿最北端の集落。人口は約180人、

計75世帯、宝物は日本海に面した美しい棚田（日本の棚田百選）だ。その約400枚の棚田の中に、今年約20年ぶりに開墾され、命が宿った田がある。【袖志の棚田再生プロジェクト】として5月12日に実施された田植えイベントでは、その田を舞台に多くの出会いと再会が生まれ、たくさんの笑顔の花が咲いた。

集落の高齢化・人口減少により全体の約15%が休耕田となった3年前、田植え体験にやって来た大学生たち。全ての始まりは、棚田に吹いた小さな風であった。

大学生がやってきた

2010年春、15人ほどの大学生が京阪神から袖志の棚田にやってきた。腕をまくり、靴を脱ぎ、素足で

田んぼに入り、1つずつ手で植えていく。おいしいちゃんか、あるいはおばあちゃんほどの年齢の袖志の人々に手ほどきを受けながら。

「みんなで再生く袖志の棚田を未来へ」を合言葉に、【袖志の棚田再生プロジェクト】は始まった。「大学生と一緒に棚田を再生しませんか？」2010年4月、地元出身の大学院生や有志の提案を受け、地域が応えた。休耕田だった2枚の棚田（8a）を数年ぶりにおこし、田植え、草刈り、稲刈り、そして収穫祭と1年間を通して活動。毎回、京阪神から平均15人ほどの大学生がやってきた。一番の盛り上がりは、毎回復に実施する交流会。交流と体験が取り組みのキーワードだ。

大学生は、袖志に変化をもたらした。大学生にとって、袖志のくらし、食、風習や技術など、袖志の全てが新鮮で魅力的だった。棚田も例外ではない。袖志の人々は、日々見慣れた忘れがちな、自分たちが持つ宝物



の価値を、大学生との交流の中で再認識できた。それに伴い、人々の意識は少しずつ変化していった。再生した田の維持管理は地域にとって大きな負担だが、棚田を守っていく、地域を元気にするんだ、という機運が高まりつつあった。

「袖志棚田保存会」設立

2011年3月、当時の区役員が動いた。棚田に吹いた風を無駄にしない、これを機に本格的に棚田保存に取り組むべきだ、そうした想いを胸に「袖志棚田保存会」を設立。事業内容は、2010年に続く大学生やボランティアの受け入れによる体験・交流事業と再生した棚田の維持管理、それに有料会員制（5000円/年あたり新米10kgなど）の導入と袖志棚田米のブランド化による地域全体の活性化。「ヒトと資金」が循環する仕組みの構築を当面の目標とした。

2011年度は、新たに5㍓（5枚）の休耕田を再生。リピーターができれば、社会人ボランティアの参加者が現れた。都市部のイベントで

の試作販売やPRなど、動きも活発化してきた。一方で課題は、活動主体としての組織は設立されたものの、地域内で協力体制が確立していないこと。地域住民の機運の高まりをどのように形にするか。風が運んできた種は小さな芽を出し始めたが、まだしっかりと根付いてはいない。

地域に根付く、まちにひろがる

「棚田を守っていくためには、地元が中心にならなければいけない」。2年間で積み重ねた想いを胸に、保存会役員で検討した結果、地元袖志住民を対象にした会員制度（1000円/年）の導入が決定。2012年4月に説明会を実施、この間の協力者に声かけを始めた。すると、30人以上の方が入会を希望。多くの方が協力を申し出てくれた。2年間の体験・交流事業で、「土」は十分に肥えていたのだらう。

まちにもひろがった。過去2年間の参加者からの口コミ・facebookでのPRの結果、5月12日に実施した田植えには過去最高の約70人が参加、会員も20

人を超えた。さらに、多様な「風」は取り組みに新しい動きをもたらす。現在、芸大生が保存会のパンフレットや米袋をデザインしている。2012年は12㍓（3枚）の休耕田を再生、計25㍓の再生田には、この秋も、たくさんの人々の想いが詰まった黄金の稲穂が実る。

おわりに「風」と「土」

高齢化・人口減少が進む地域に、一輪の花を咲かしたい。そのための役割があるとすれば、外からやってくる大学生は「風」、そこで暮らす地元住民は「土」。今、袖志では風

が運んだ一つの種が、土に着き、土にもまれ、深く根付きた。この種がどんな花を咲かすのか、そのためには水をやり、草を抜く、引き続き多様な力が必要だ。色々な方の支えと共に、大切に、ゆつくりと育てていきたい。この2年間に棚田で咲いた、たくさん笑顔の花に負けな

い、そんな花になるように…。

棚田へのアクセス

【公共交通】KTR（北近畿タンゴ鉄道）峰山駅下車、丹海バス経ヶ岬行き・袖志下車（終点の一つ前）

【自動車】京都縦貫自動車道・綾部宮津道路の与謝天橋立ICを降り、国道176号から312号へ。タンゴ鉄道に沿うように北上。峰山駅近くで国道482号に入り、さらに北上。国道178号にぶつかって右折。航空自衛隊基地を過ぎると、袖志海水浴場を見下ろす山側に棚田。ICから約1時間

お問い合わせ

袖志棚田保存会

〒627-0245 京都府京丹後市丹後町袖志1421

事務局(瀬野)：090-5125-8267

e-mail：tanada.hozon@gmail.com

●ホームページ <http://tanada-hozon.jimdo.com/>



棚田の四季

写真・文 梅野 秀和



緑のじゅうたん

田植え直後は弱々しかった稲の苗も、この時期になると田んぼ一面、緑のじゅうたんを敷き詰めたようになります。

「米」という字を分解すると、「八」と「十」と「ハ」で「八十八」と読むことができ、昔から米を作るには八十八もの多くの手間がかかるといわれてきました。農業機械や化学肥料の普及などによって、昔と比べると農家の負担は大きく減ったと思いますが、それでもまだまだ作業も多く手間もかかります。夏は頻繁に畦の草刈りや水の加減を毎日見て回らなくてはなりませんし、稲の生長に必要な肥料や病害虫の駆除など気を抜けない日々が続きます。

特に夏の田んぼの草刈りは過酷な労働で、太陽は容赦なく照り、草いきれてあたりはむせ返るようです。この時期になると、汗びっしょりになりながら畦の草刈り作業を続けることが想いされます。



Profile

梅野 秀和

うめの ひでかず

1947年、佐賀県生まれ。写真は独学、主に写真雑誌やコンテストで学ぶ。1990年頃から風景写真を本格的に撮り始める。1994年、月刊誌『日本カメラ』で年度賞受賞。1998、2004、2007、2008、2009、2011年視点入選。2002、2003、2011年二科展入選。2005、2006年JPS展入選。

●写真集 「九州花百景」「九州花百景Ⅱ」「棚田～田んぼの四季～」(ほおずき書籍)、「九州の一本桜」(梓書院)、「だんだん田んぼの詩」(権歌書房)ほか。





棚田博士
は
今日も行く!

中島峰広の
全国棚田行脚

南予にある壺神山中腹西斜面の棚田

愛媛県大洲市榎谷



つづら折りの道を進み、 坂の上にある山上の集落へ

大洲市は愛媛県西部、加藤氏6万石の城下町から発展した町で、盆地中央を肱川が流れる田園都市。平成の大合併により長浜町・肱川町・河辺村を併合した。榎谷は、旧長浜町東南部の標高500^{メートル}、壺神山の中腹西斜面にあり、標高970^{メートル}の山頂までは1戸の民家もない最高所の集落である。

榎谷を知ったのは、写真集『南伊予の地域遺産・棚田』による。大学で民俗学を専攻した著者の河野豊さんは西予市野村町の出身。会社に勤めながら、消え行くふるさとの原風景に魅せられ15年の歳月を費やした労作。茅葺きの民家、棚田のある里山の風景にこだわり、これらの遺産を残したいという思いが込められている。

2012年4月中旬、河野さんの案内で自家用車に同乗、榎谷を訪ねた。現地までの公共交通機関はなく、最寄り駅の予讃線伊予白滝からは自家用車が徒歩によるしかない。そのルートは、駅から商店街の通りに出て左折、商店街を過ぎ白滝小学校を右に見ながら西に進み、三叉路を右折する。道路の傍らに戒川小学校まで5^{キロ}の道案内が立っている。ここからはカーブと急坂の連続、標高10^{メートル}から500^{メートル}まで上ることになる。スギ林のなかの道は道案内のみが頼り。最初の分岐点は本郷・大平方面へ向かう道、二番目の分岐点は石堂・榎谷方面へ向かう道をとる。しばらく進むと10年前に休校、今年3

月に廃校になった戒川小学校にたどり着く。満開の山桜のなかにあった校舎は斬新なデザインで、廃校にするには勿体無いような建物である。

小学校のある石堂集落からは一段と道幅が狭くなり、小型車がかりうじて通れるほど。この先に集落があることを知らなければ引き返したくなるような道である。榎谷の人たちもこの道を通るときは緊張するという。狭いつづら折りの道を進むと豆柳の集落。民家や棚田の配置が榎谷に似ていて、河野さんは最初に訪ねたとき間違えたそう。さらに急になった道を

なかしま みねひろ

中島 峰広（棚田博士）

早稲田大学名誉教授。学術博士。NPO法人棚田ネットワーク代表。棚田学会会長。全国棚田（千枚田）連絡協議会理事、棚田サミット開催地選定委員会委員長。1933年宮崎県生まれ。早稲田大学教育学部地歴科卒。2004年まで早稲田大学教育学部教授。著書に『日本の棚田—保全への取り組み』『百選の棚田を歩く』『続・百選の棚田を歩く』（以上、古今書院）。現在、百選外の棚田についての執筆準備のため全国行脚中。



1：耕作の準備が進む棚田／2：山桜の中の戒川小学校／3：石積みの前で。左から二宮さん、城本誠一さん・音松さん、手前が松本さん

上り檜谷に到着する。伊予白滝駅からは檜谷の集会所まで車の計器で8^分の距離、歩けば2時間以上はかかるという。まさに、「坂の上にある山上の集落」である。

棚田は、壺神山中腹、標高450～580^{メートル}、傾斜5分の1の斜面に分布、民家が連なる道路の上下にわかれていた。主役となる道路より下の棚田は西向きと南向きの斜面にあり、最も広く、3列の棚田が十数段から数十段になって並んでいる。北の谷の北側、南向きの斜面には3列の棚田がそれぞれ十段前後あり、西向き斜面の棚田に合流して、地区のなかで最も優れた景観をつくりだしている。

隣に住む子や孫も 農作業や家事を手伝う

集会所には河野さんから連絡を受け、集落の中心メンバーである城本誠一さんと父親の音松さん、松本正雄さん、二宮岩夫さんの4人が待っていた。集会所脇にある林道完成を記念した石碑によると、中川道路管理組合の組合長城本音松、副組合長松本正雄、会計二宮岩夫とあるので、集落の三役といえる人たちである。

城本家は52歳の息子誠一さんが世帯主、認定農業者であり、中山間地域等直接支払の代表や区長を務める集落のキーパーソンの存在。家族は奥さん50歳、市内の会社に勤める長女26歳、父親82歳、母親79歳の5人である。統計上は長女が勤め

人で、奥さんが白滝の直売所へ時々パートにでているので兼業農家であるが、2世代の夫婦が農業に従事する主業農家で、シイタケの栽培が主な収入源になっている。(※注)

誠一さんは、高校卒業後、家電の量販店に勤めていたが、会社が合併したのを機に47歳で退職、就農した。小型トラクター(15馬力)、歩行型2条田植機、乗用型2条刈コンバインを所有、自作地の棚田70^{アール}、55枚と離農した高齢者の棚田30^{アール}、20枚のあわせて1^{ヘクタール}、75枚を耕作している。

父親の音松さんは高等小学校を終えた後、土建会社の日雇いに出たことはあるが、棚田を守り山林の仕事に精をだしてきた。多少耳が遠くなっているが、まだ息子に負けないほどの仕事をする現役。棚田の石積みを行う石かけ名人(石工)であり、シイタケ栽培を行う前の生業、炭焼き時代には窯を築く左官にもなったというから、百の仕事ができる意味の百姓と呼ぶに相応しい人だ。

松本さんは78歳、同じ年齢の奥さんと2人だけの世帯。高等小学校卒

業後、炭焼きや土木作業の日雇い、後に森林組合の労務班、あるいは白滝の林業会社に勤めた兼業農家。現在は農業一筋、小型トラクター、歩行型2条田植機、バインダーを用い、自作地40^{アール}、38枚と離農した農家の12^{アール}、7枚の棚田を耕作、背後の山の斜面を利用した50^{アール}の畑で栽培するシキミ(仏事に用いる植物・編集部注)が主な収入源になっている。用水は溪流から引水され、春の井手浚いは関係する数戸で行うが、人手がないときは関係のない集落の人に助けってもらうそうだ。

稲木(ハサ掛け)で乾燥し香りがよいと評判の米(コシヒカリ、アキタコマチ)は、白滝の直売所に6キロ2万4千円で出荷しているという。一昨年までは耕耘機を使用していたが、麓の集落八多喜(はたき)に住み、精密機械工場に勤める長女の夫55歳が手伝うようになったので、トラクターを購入した。さらに、食品工場に勤める20歳の孫も父親と一緒に集落に上がってきて農作業を手伝うようになったそうだ。夫婦そろって足が悪くなり、作業が大変になっていたので助かると嬉

しそうにおつしやる。

二宮さんは75歳、奥さんは25年前に乳がんで亡くなった。91歳の義母を6年前に、97歳の義父を一昨年亡くしてから独居世帯。長く奥さんの両親を介護してきた心優しい苦勞人である。八多喜の大きな農家の出身、三男だったので二宮家に婿として入り、農作業に励んだ。34歳の時、長浜にある昭和電工系の昭和サボアに入社、定年になる60歳まで勤め、両親が耕作する水田60ア、50枚、畑20アの作業を手伝う兼業農家になった。

退職後は自身が中心になり、義父が亡くなるまで水田40アを耕作していた。現在は水田10ア、10枚を耕作し、残りの50アは転作田にしてシキミを栽培している。子供たちは、51歳の長男が八多喜に住み、大洲市の消防署に勤めており、勤務のない日は必ず上がってきて農作業や家事を手伝ってくれるという。また、松山で世帯を持つ46歳の長女も父親を気にかける毎週のように顔を出すそう。そのため、独居の淋しさはないとおつしやる。

互助の精神も旺盛 集落はしっかりと生き残る

集落は、かつて20戸あったが、現在は11戸、そのうちの5戸は高齢者の独居世帯。残りも城本家のぞいて高齢者夫婦の世帯という。これだけで判断すれば間違いなく限界集落であり、すぐにでも消滅してしまいうのである。しかし、松本家や二宮家のように、麓の集落から子供や孫たちが上がってきて農作業を手伝っていることを忘れてはならない。

ほかに、86歳の寡婦和佐田さんの家では白滝に住む56歳の次男が農作業を担っている。85歳の寡婦白石さんの家も、長浜町に住む57歳の左官業を営む長男が上がってきて農作業に励んでいるそう。このように、榎谷では、11戸のうち5戸は後継者が農作業に従事している。

『限界集落の真実』（ちくま新書）の著者山下祐介は、1980年代末に大野晃によって提唱された限界集落の多くが20年経っても依然として存続している事実をあげ、

限界集落がすぐに消滅しないことを明らかにしている。その理由として、一つは限界集落の住民の多数を占める80歳前後の昭和一桁世代が頑張っていること、もう一つは次の世代の子供たち、とくに長男あるいは長女が近くの都市に住み、農繁期には農作業の手伝いに戻ってくることをあげている。榎谷では、『限界集落の真実』で述べられていることとまったく同じような状況を見ることができ、互助の精神も旺盛で集落はしっかりと生き残っているのである。

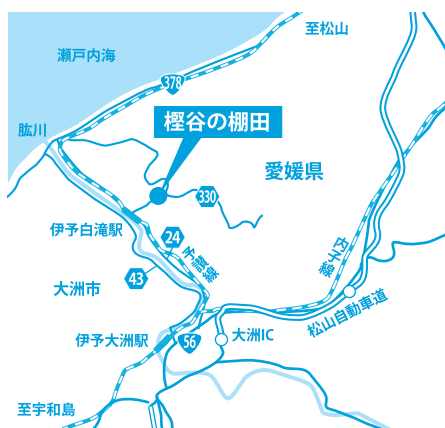
※注

シイタケの栽培は、約3分の2のクヌギ林を利用し、伐採してホダギとして利用、毎年1か月かけて12万個の植菌を行っているという。その数を訊ねたら「数えたこともない」と言われて笑われた。後で現場を見ると、50アほどの木漏れ日のあるスギ林にホダギが伏せられており、数えられないほどの多さに圧倒された。10月下旬から4月中旬頃までが収穫期で、その最盛期には一家総出の作業になる。



膨大な数のホダ木

榎谷の棚田へのアクセス



予讃線伊予白滝駅から車または徒歩。
距離8キロ、歩いて2時間以上。
榎谷集会所は愛媛県道330号沿いにある。

会員の声

岩ノ作棚田での 田植えに参加して

東京都荒川区 高田栄子

去る5月12日(土)、栃木県茂木町での田植えに参加させていただきました。この日はスタッフの方も「イベント開催日中1、2を争う絶好の快晴」と朝から太鼓判を押してくださるような素晴らしい田植え日和で、行き的高速道路も順調、うきうきしながらあっという間に岩ノ作棚田に到着しました。

1週間前に茂木町を襲った竜巻の影響(役場の近くは被害が生じて大変だったそうです)は棚田には及んでおらず、美しい緑の里山が広がっていました。本当に目に染みるような日本の原風景です。

田植えに参加させていただくのは、2年ぶり2回目。1回目は、持参したごくごく普通の雨用長靴をはいて田んぼに入ったのが大失敗で、一足移動することに「ずぶっ」とはまって大汗(冷や汗?)をかいた・・という苦い経験がありました。ですので、今回は「はだし」で入ろう、と初めから決めていました。そして、田んぼに最初の一步を踏み出した瞬間、何だか懐かしいような心地よい感覚を覚えて、子どもの頃泥んこになって遊んだ土のにおいと感触を思い出しました。日頃、靴をはいてアスファルトを踏みしめて生活している間にすっかり忘れ



ていた感覚です。

風にそよぐ緑の苗が田んぼの中に徐々に広がっていく様子を眺めながら、多分1時間もしないうちに体験手植えは終了しました。これも参加者全員が力を合わせたからこそでしょう。みんなの顔が充実感にあふれ、笑顔になっているような気がしました。

その後はお楽しみの昼食です。田んぼの周りに座って、植えたての苗を見ながら食べるおにぎりはまた格別でした。農家の方が作ってくださったお漬物もいっそうおいしさをひきたて、多分いつもの2倍くらいたくさん食べたように思います。お米の味をあらためてかみしめたひと時でした。

午後の里山の散策では、絶滅が危惧されるような草花に出会うことができ、さらに棚田を取り巻く環境の大切さを実感しました。そして、秋になって実り豊かに黄金色になった田んぼと再び出会えることを楽しみにしながら、棚田を後にしたのでした。

会員のひろば



会員の声募集!

「こんな活動をしています」「こんなことやります」という皆さんの声を編集部までお寄せください!「ご要望、感想やご質問でもOK!」(会員の声800字まで、会員レポート400字まで。写真も添えて) 〒160-0023 東京都新宿区西新宿七ー1ハ一六 トーシンハイム七〇四号「棚田に吹く風 会員のひろば」宛 メールでも受け付けています ↓ hiroba@tanada.or.jp



会員さんの Best Shot!

会員のみなさんの ベストショット募集!!



みなさんが撮影した棚田や作業風景の写真など、ベストショットをコメント(70文字程度)を添えて編集部まで送ってください。毎号、紹介させていただきます!送り先は下記。

〒160-0023
東京都新宿区西新宿7-18-16
トーシンハイム704号
「棚田に吹く風 ベストショット」宛
メールでも受け付けています
⇒ hiroba@tanada.or.jp



早乙女棚田神事

大阪府大阪市 中崎 義巳
(和歌山県海南市孟子の棚田)

棚田散歩

滋賀県大津市
仰木の棚田



毎年5月には実家の近くにある仰木の棚田を訪れる。例年通り棚田を一望できる丘に腰掛けて、水を張られたばかりの棚田を眺めていると、作業をしていた農夫が私に言った。「何か面白い物でもあるのか?」と。

平地の少ない日本の地形。収入源の少ない昔の人々は山の地形を利用しながら人力のみで棚田を作った。少しでも収穫を増やしたい昔の人々の苦勞がしのばれる。だが今は棚田でお米を作らなくても、海外から食料が入ってくる時代。農作業を行う人々にとっては、農具も十分に使えず、採算の合わない棚田などは早く整理したい存在そのものに違いない。

もし「将来に対して希望」があるなら、お金をかけ、重機など使って棚田をつぶして、土地を平らにする事は可能なのだしそうしたほうが良いだろう。だがそうまでしてやつてられない。なのに、その人々に対して「日本の原風景だ。棚田を守れ」などと言うのは勝手なお願いをしているような気がした。

「何か面白い物でもあるのか?」の言葉が私に重くのしかかる。「棚田を守り、残したい」と言うなら、どうすべきなのか? この不便だといわれる里山の中山間地や棚田に対して我々がどのような価値を作り、将来に対する希望を作っているのか? もう一度、これを機会に考えてみるべきだろうと思う。いろいろ出来るはずである。

荒地ばかりの地球の土地。「雑草が生い茂って困る」などと悩む資源の多い国など、世界にどれほどあろうか?

(東京都板橋区 中野 順平)



MOVIE

お米が食べられなくなる日



2012年 / DVD / カラー 35分
¥8,000+税 (図書館価格
¥16,000円+税)

制作: 特定非営利活動
法人 アジア太平洋資料
センター (PARC)

監修: 大野和興

■トレーラーは以下のURL
でご覧になれます。

<http://www.parc-jp.org/>

■ご購入のお申し込みはこちらから

<http://www.parc-jp.org/video/index.html>

日本の主食、お米。しかし、生産者たちは、10年後には日本で米づくりができなくなるかもしれないと言います。TPPへの参加が決まれば、日本のお米が私たちの食卓から消えてしまうかもしれません。日本の生産者と消費者、そしてメキシコやタイの農民の声にも耳を傾けながら、自給の意味や、食糧の貿易の問題点、米をつくることで保たれる自然の循環・多様性などについて考察し、私たちが大切にしたい価値とは何かを問いかけます。

編集部イチオシ! BOOK & MOVIE



BOOK

TPP亡国論



中野剛志 著

¥760

集英社新書

2011年3月

TPP賛成派が掲げる「アジア太平洋地域の成長を取り込む」「国を開くというメッセージ」「貿易・投資で日本に有利なルール作り」等の論拠の全てを、石油危機やリーマン・ショックなどの世界経済のこれまでの流れから説明しながら鮮やかに崩してしまふ。中国と韓国はTPPに参加する見込みが低く、日本だけが過激な自由貿易ルールに晒されかねないこと、実は日本の関税率は世界的に見ても低く、すでに十分「開国」していること、等々。TPPは農業と関連付けて語られることが多いが、どうやらそんな問題ではなさそうだ。(中央公論新書大賞2012で第3位になった本)



このコーナーでは、棚田ネットワークのスタッフの活動や事務局のことなどを幅広くお伝えしていきます。

新事務局長就任のご挨拶

棚田病に侵されながら



この度、2年の任期で新事務局長に就任した高桑智雄です。私は、棚田のことは何も知らないまま、ひよんなきっかけで2005年から事務局をお手伝いすることになりました。それから8年、気がつけば悪性の棚田病に侵され、田んぼから足が抜けなくなり、挙句の果てに、伝統ある棚田ネットワークの事務局長にまでなってしまうとは、長靴を履いたシンデレラを演じているかのような気持ちです(笑)。とはいえ、前任の事務局長は、棚田ネットワークの立ち上げから、この17年の偉大な歴史を築き上げてきた方です。そんな前任の偉業を引き継げる器は私にはありません。ただ、幸運なことに、この棚田ネットワークには、棚田のためなら何でもします!という世代やジャンルを超えた有能な方々が集っています。私は、そんなみなさんの熱意と力を結んで、棚田の未来に活かして行く「ハブ機能」くらいにはなれたらと思っています。

私が事務局に関わったこの8年間、時代は大きく変わり、ますます「棚田」に対する注目は大きくなっています。方向性が見えず、閉塞感漂うこの時代に、私たちが「棚田」に見つけてきた「答え」が今必要となってきました。互いの立場から足を引っ張り合う政治や経済では美しい棚田やおいしいお米は守れません。世代や立場を越えて協調しあい、「本当に大切な物は何か」と日夜語り合うNPOならではの棚田ネットワークの気風こそ、これからの時代を変えていくエネルギーになると思います。

新事務局長として何をするのか、まだまだ暗中模索ではありますが、会員のみなさんのお知恵をお借りしながら、「棚田」のためにかんばりたいと思います!

高桑智雄(42歳)

2つのマーケットで ポット苗体験・販売やりました

2012年5月26日・27日 報告 久野 大輔

ポット苗は昨年、丸の内さえずり館で実施し好評だったので、今年もやってみようということに。26日(土)は青山ファーマーズマーケット、27日(日)は代々木公園のアースティマーケットに出店しました。2日とも天気も良く大勢の来場者がありました。プラカップに土と水を入れお箸で混ぜ、簡易田んぼ状態をつくります。そして、そこに苗を植えポット苗完成! 子どもから大人まで通いかかる人の反応も上々。普段土に触れることの無い都市の人たちにはとても新鮮だったようです。

売り上げは思ったほどではありませんでしたが、来年ももっと工夫をこらして出店するつもりです。



社員も地元も大満足! 好天の中、CSR活動

2012年5月23日 報告 清水 一徳

5月23日(水)、新生銀行グループの社員35名が、ボランティア活動のため新潟県十日町市中里の重地集落を訪問。集落の自治会役員など13名の指導を受け、3班に分かれて集落内の道路の側溝の泥上げや道路脇の樹林の伐採、掃除などを行いました。昼食は、集落のおかあさんらと女性社員と一緒に作った、地元の山菜を使った郷土料理と、魚沼コンヒカリのおにぎり。天候にも恵まれ、社員の献身的な作業のおかげで予定より早く作業を終えました。作業後は近くの重地大池でお茶を飲みながらの親睦会。社員からは「来年もまた来ます!」と力強い約束が交わされました。



栃木県茂木町

茂木プロジェクト

五月晴れの岩ノ作棚田で田植え



岩ノ作五月の森



5月12日、田植えを行いました。当日は暑くもなく寒くもない絶好の田植え日和。総勢46名の歓声が若葉の緑に溢れる岩ノ作にこだましました。いつものことながら、私たちを温かく迎えて下さる地元の方々には感謝の言葉もありません。赤飯をたくさん差し入れて下さった小深集落の小林さん、ご馳走さまでした。1時間あまりで植えた田んぼは3畝弱。私たちが年間に食べる米の3人分弱ということは、現場ならではの新たな理解でした。

昼食の後、念願であったトンボカレンダー（第3版、監修：齋藤舜貴、助成：三菱食品）の掛け替えを行いました。これまでの7年間に生息確認したトンボは28種類になりました。その後は恒例の里山散策。絶滅が心配されるキンラン、ギンラン、エビネなどに出会えたのは幸運でした。葉緑素を持たない怪しげな白い植物「ギンリョウソウ」を初めて見た人も多かったようです。

（安井 一臣）

岐阜県恵那市

棚田ビオトープ プロジェクト

ヤマアカガエルの卵塊調査と棚田ビオトープ田植え



まずはヤマアカガエルの卵塊調査から。4月10日に追調査をおこないました。その結果、26卵塊増え、合計78卵塊、19箇所という結果となりました。

次は棚田ビオトープ田植え。5月29日10時から15時まで開催、参加者は岐阜県立国際園芸アカデミーの学生と私の2名とさびしい限りですが、棚田オーナー制度のオーナー3名が見学に来て説明をおこなったので都合5名でしょうか。棚田や生態系の保全は継続することがなによりも重要です。東京の人はあてにならないので、ひとりになっても活動を続けるつもりです。ともあれ、いつも通り水田内の除草から開始、ヤマアカガエルのオタマジャクシや成体（大人に成りたて1匹）が逃げるのを見ながら午後からは田植え、その途中から小雨、雷が鳴りだしたので急いで田植えをすませました。なお、坂折川河川工事のため、下段の棚田は工事用通路として利用されています。

（相田 明）

静岡県松崎町

昔ながらの米づくりプロジェクト

『畦付け』『田植え』やりました！



泥を塗って畦を作っていきます



天気も良く、最高の田植え日和！

「昔ながらのお米づくり体験」では、4月28、29日に畦付け作業を行いました。石部棚田は、松崎町のなまこ壁を思わせる伝統的な技で美しい畦を塗ります。平場の田んぼは言うに及ばず、棚田ですら、現在はどこでも「畦シート」

などで代用しますが、伝統技術の継承の意味も込めて、地元のお母さんに昔ながらの本畦付けを学びました。そして、5月19、20日には、いよいよ田植え。復田から田んぼ作りまで行った参加者には感無量の瞬間でした。

夏は2度の草取りを企画しています。ぜひご参加を！

（高桑 智雄）

棚トレ2012 みんなでつくる 棚田合宿 2泊3日

in 佐渡島

7/14(土)15(日)16(月祝)

今年も
やります!

TANADA TRAINING

世界農業遺産にも登録された佐渡島での合宿形式の体験・交流ツアーです。棚田番長と一緒に海を見下ろす棚田を散策しながら棚田のお話を聞いたり、放鳥されたトキの餌場となる棚田ビオトープを整備・復旧したり、地域の方々と交流会など盛りだくさん。美しい佐渡島の棚田を肌で感じてください!

棚田番長とゆく岩首棚田散歩

朱鷺の餌場ビオトープ整備

地域の方々と交流会

■ 参加費 14,000円(非会員15,000円)

※宿泊費・食事代・島内移動費込み
※佐渡島両津港集合・解散



■お申し込み・お問い合わせ 棚田ネットワーク Tel / Fax 03-5386-4001 e-mail : info@tanada.or.jp
※詳細は、かわら版、HPで。HPからもお申し込みできます。 <http://www.tanada.or.jp>

棚田の
応援団

わたしたちと「棚田の応援団」やりませんか!

棚田ネットワークは「棚田の保全に協力したい!」という会員によって自主的に運営されているNPOです。消えゆく美しい「棚田」をどのように保全していくことができるのでしょうか?一緒に考えませんか?ぜひ、私たちと棚田の応援団になりましょう!

会員に
なると!

会報誌「棚田に吹く風」(年6回)やイベント案内お届けの他、棚田ネットワークが主催する各プロジェクト(イベント)への参加や、スタッフとしての活動もできます。

年会費

○個人会員

維持会員 1口1万円(1口以上)
一般会員 3,000円
学生会員 2,000円

法人会員を募集しています!

私たちの活動にご支援・ご協力をいただける、企業、団体、事業主さまを募集しています。詳細はお問い合わせください。

年会費

○法人会員

1口3万円(1口以上)

この上のスペース(ページ上1/2サイズ)は法人会員さまのPRスペースとして広告や広報にご利用いただけます。(詳細はお問い合わせください)

活動報告にもありましたが、今年はポット苗の販売を二つのマーケットで試みてみました。前日の準備で、「いや、明日100個売れたらどうしよう」とかスタッフで盛り上がり、合計200個分のストックを作ったのですが、結果は2日合わせて50個……。何とか出展料をまかなうくらいにはなったのですが、とうとうい会の活動費の補填になるような売り上げにはなりません(泣)。いやいや、みんなすごく興味を持ってくれるんです。でも、青山や代々木でこれから遊ぶぞ!と言う人たちは、ちよつと持つて帰るのに難儀があつたように思います。でも企画としてはとても可能性があり、意義もあります。みなさん、ぜひ来年のアイデアをください。

編集部から

ホームページのぞきを見て!

全国の棚田保全情報を掲載しています!

掲載希望の方は、「掲載板入力フォーム」より受け付けています。



www.tanada.or.jp

棚田に吹く風

2012年7月号 Vol.83

発行 NPO法人 棚田ネットワーク

〒160-0023
東京都新宿区西新宿 7-18-16 トーシンハイム 704 号
Tel / Fax 03-5386-4001
e-mail : info@tanada.or.jp URL : www.tanada.or.jp
郵便振替口座 : 00100-7-151565

【今月の表紙】美しいコシヒカリの苗床(5月26日、青山ファーマーズマーケットにて、ポット苗販売)